

伊勢両大神宮領庄園の研究史によせて

中 田 四 朗

新地誌編 戦国大名の権力構造 遠州藩御厨を中心として 歴史学研究 昭和28

伊勢両大神宮領庄園の発生、成立、発展、衰退、支配形態、収納体系、その発生の複雑性、両宮の存在からくる特殊性、それらに関連する神宮の地位などについての構造的な総合的な研究は院門領庄園、寺領庄園などの研究の高度性に比すると今尚端緒的な境にとどまっている。しかしこういつたからとて神領庄園に關する従来の研究の業績に盲目であつたり、その成果を否定するものではない。なんとすれば次にあける如きものは神領庄園に關する重要な研究であり、その研究は学界でも高く評価されているからである。

村岡良弼	下総庄園考	歴史地理2の8・9	明治33
村岡良弼	葛西御厨疆域考	歴史地理3の11	明治34
中山太郎	築田御厨の研究	国学院雜誌31の10	大正11
大森金五郎	相馬御厨について	歴史地理30の1	大正11
三上左明	大沼站沢御厨	歴史地理50の6	昭和2
三上左明	大庭御厨の研究		昭和6
山中武雄	源義朝と相馬御厨	史学雑誌6の1	昭和9
一志茂樹	信濃国御厨史料とその考察		昭和11
	附御厨関係史料		昭和12
一志茂樹	信濃御厨について	信濃6の2・3	昭和12

石によってわかるように神宮領庄園の研究は最後のものを除けば戦前のものである。このことは戦後に高く発展した庄園研究の立場からいえば尚構造的な立場からみて不十分なものである。したがって、神宮領庄園の研究の困難性が史料的不制約にあつても、神宮史に明らかにするために、また日本庄園史を理解する上からもその総合的な研究は放置されるべきものではないと思ふ。

私が神宮領庄園の研究に着手した意図は右のような重要な意義の幾分でも明かにする担手になろうとしたものであるが、未だその成果をもって諸兄姉に批判をうけるまでに至っていない。それは私の能力を遙かに超えた高い次元のものであるからである。ところが、今後能力の限界内において私なりの構造的な研究を経た体系付けをなすつもりでいる。諸兄姉によって神宮領庄園に關する史料が提供され、その史料の存在が教示されるなら、史料的不制約を幾分でも克服しうると信するので、この宮爲をして一段の光彩を放ちうることのあるよう助力を依頼してやまい。

従つてこの稿は神宮領庄園に關する研究ではなく、神宮領庄園の研究にあつて、これを概況的な力作として一応目を通しおくべきものを紹介し、最後に山中武雄氏の研究された祖馬の御厨の史料をかかて神宮領庄園の成立や消滅に關する理解への指針としたいと思う。

神宮領庄園史の概説的のものとしてあけるべきものは寛居雜、神領之部、神宮典略神領、神封通考などであるが、太神宮御神領神戶御厨御膳與鹿沼草之部」も亦この範疇に入るものである。

まず寛居雜纂神領之部は「神領政治沿革・神領沿革」ともいわれる内容を持つものであり、外宮推弥宜足代弘訓(号寛居)の筆録したものである。彼の「神領考証」「神領職掌人事」などは「寛居雜纂神領之部」と關係あるもので、神領考証は伊勢国神領考証と各神領考証とからなり、神鳳抄、神宮雜例集、同雜事記、外宮神領目錄、外宮神領給人引付、吾妻鏡、宮司公文抄、内宮引付、氏経御引付、松尾兵庫古券など神宮領庄園の典拠によつて考証したもので、神宮領庄園研究には一覽しておくべきものであらう。「神領職掌人事」は天保十五年に初されたので、その序文に「元弘建武の乱以前神領其実あまし時々神三郎兼野道後三郎重時三安濃郡飯高郡等の政所あり、又一郡六とよ郡司あり、又一郡ことに惣刀旅、水刀旅あり、郷は拒捍使あり、中世以来祭主の補任なり、弘訓好古の癖ありて神領の事実を考索し、考証を作らんとする。困子惣官公文抄、公文初心抄、公文翰林抄并一涉せし諸家の古文書の中より神領の事と關係ある事を抄出し、此一冊とぞ。もとより管見のまゝ後よて考

索疎漏、たゞ大綱を挙るのみなり。」といつてゐるので、その意図を推測しうるのであるが、最後に「右等皆祭主の補任なり、かくの」とごくあまの神領を元弘建武の程より後次第に乱妨せられ押領せられ、今のとくなり行まり、古く復せんとあるへあらまをいへとも、きの世のさ場をくに考索しかんやせ免ての神忠なるへし」といって、神宮の衰微を慨歎したもので、これも神宮領庄園の支配形態を知る手引としては或意味を持つ。神領政治沿革は庄園形態成立に先行するものから起筆し、勿論當時として、また神官という立場からのもので今から見れば非合理的なものを含んでゐるが、古典に依拠する実証的な態度は一応認めるべきである。その中にさきの「神領職掌人事」に主張したものと同様に「其後元弘建武の乱は又天下の時勢大に変せしハ神領いよく衰微して、仁木右京大夫(義長)伊勢国の守護となりて在國せし時前々更ハ公家武家とも手をこゝさる神三郎ようち入て、大神宮の御神領を押領す。是よりて衆王神官京都より上り、公家は笑聞し、武家は融訴ふ、閑閑よりこれより、る不思議やあると。嚴密の論旨、御教書をなされしととも義長あつて承引せし。則我を訴認し……」といつて元弘建武をもつて神宮領庄園の衰微の、一の大きな特長としてゐるのは、日本庄園史の変遷の時期をこの時においたのに対応する見解である。そして「其後永享十二年北畠顯雅卿、同教員卿、足利義教將軍は降参あり。將軍これをよろこびてみて右保刑部大夫持頼ハ伊勢守護を停めて、北畠殿に給ひ國中の分領を定めらる。」ことによつて「是によりて又神領の事一度ハ神三郎并諸郡中其外神戶、御厨ハ元弘建武のものと武門神領

し、此時残る所の神領、度会郡山田三保、宇治六割、多氣郡希宮領、飯野相可庄也。是又国司畠山殿の管領なりて南方紀伝にみえり」といって、神宮領庄園の解体をこゝにおいている。そして「庄園御厨の事」の章には「庄園も御厨も全く同じ事にて皆松領を申り」とのべ「悲してかやうの制度の最ハ時代はちとすひ改変仕り事多かり」という見解は僅とすべきと思う。そのために、「其本派より御會得不被成りてハす多くの事も御分りなされうき儀と奉存り向本朝制度沿革のあらましを粗左に申上り」といって、神宮領の発生、神宮庄園の形成、衰退などを概説し、前と同様に「元弘建武乱後武家の人々公家の御領神社佛閣の領地を凌犯せられ後ハ、庄園御厨など申すさへ廃絶仕りて、今よてハ知れよく事に罷成り、これ庄園御厨の大略は御座り」と結んでいる。そして「體委しき儀を庄園御厨考を草稿仕置り向淨写仕入御覧可申り」と附言しているので、庄園御厨考なるものなあった筈である。私は今尚このものの存在を明らかにし得ないため、その内容を紹介することができないのは遺憾である。しかし現在神宮文庫に所蔵されている「寛居反古帖」なるものがあるが、この中には神宮領庄園に關するものが多くあるから彼の庄園考はこの史料を基礎としてなされたことが推測できる。それは明治二十二年七月「今度神宮司廳より宮内省図書局の御沙汰のよしよて先師足代弘訓編輯の神領考証の事を御尋向あり、然るに此考証ハ草稿有のミよて完全たる淨書の物なし。其錯乱たる草稿を謄写せしのミよて重複訛謬多あるへく、又脱漏夥なからき、いつか訂正始意せんとおもへとも至急を要する事なれば、取あえき者老の充筆をもて書訖進

進奉り申せ」と足代弘訓の弟子中西弘暹がいって筆録した「御厨記事」の中には「寛居反古帖」から引用されたものが多いところから、弘訓の庄園考の内容は大體推測できるように思う。二の「寛居推纂神領之部」はその成立の年代を明確にし得ないが、さきの神領職掌人事が天保十五年のものであるからこの頃のものと思う。

次に神宮典略三十五神領は内宮弥宜園田守良の著わしたものである。守良は足代弘訓と略同時代の人で、この著もさきの弘訓のものと時代的に隔りなく文政期頃のものである。内容的にも弘訓のものと大差なく「後醍醐天皇元弘年中の大乱より足利尊氏御武將となり、伊勢には国司北畠氏其權威を振ひ、南方五郡を治め、代々二宮の下知をなし、神領の地も併せて其地となり、纔に残る地も度々の軍戰に掠め奪れつる事多かるに、といつて神宮領庄園の衰退の概観に元弘建武を求め、それがよいは朱印制度の発現で解体するとなして「天正七年に信長朝臣の爲に国司一族滅亡せしかば、其地もおのづから武家領となり、神郡は多のみ残れり」と結んでいる。

しかし「神戸神戸古例」の節においては弘訓の「神領考証」にあたるものが、詳細に考証されており、こゝでは更に「庇任文明年中細川山名の徒乱れを起せしより、世中日々に干戈の事のみなれば、神領も多く絶行けん」として戦国地方割拠による侵略に神宮領庄園の最後の段階を占めているのは、戦国期を近世吾界への胎動の時期とし、庄園制の解体する時代となす見解なのである。彼も弘訓と同じく神官神官としてこの如き神宮の衰微を概説し、「そもく上代より大神宮の制は天下諸社に異

なれば、餘剩有とも改減の暇にあらず、もし乗件は、遠劫の罪に科すべきよりなるに、中昔には朝廷より加へ寄られし地も戦亂の時より減改せられ、はては、是は幾なる領となりて、幾はくもあらぬ衣料米をもて年中の祭祀に仕奉る如くなれるなり、されは神宮の盛衰も此神領の多少によりて知るべきなれば、古今の大略を記して明らめたるなり」といっているのである。これの弘訓のものと異なる所は神宮領庄園が朱印制度に包攝された後のものにも言及していることであり、すなわち近昔神宮領の朱印による成立をも明らかにしているのである。

「神封通考」は外宮神宮御巫清直の著で、清直が足代弘訓の影響を大きく受けたことは弘訓は清直の篤学に対して自己の所蔵する神宮に關する書を送っていることでもわかる。神封通考は内容的にいえは弘訓の神領政事沿革、神領沿革と趣を同じうしている。この述作もその著年代を明らかにし得ないが、彼が天保以後神宮の典例について勅文を上り、或は諮詢に對へたりしているから、弘訓の編輯した神領沿革が天保期と推定されるので、その以後の幕末にそくするものと思われる。彼も神宮であるために神宮成立に至る天皇時におき行へり」という所に神領の端緒を認め、律令体制下において、神領が確立したことを古書によって考証し、それが庄園化するに至るが延喜年中には、「然レハ当国他國ヲ都合セテ計レハ凡千三百口余戸アリケルナルヘシ」、神田ハ、三十六町一段アリト謂ヘリ」と計算している。その後平安時に神宮領は益々發展し、然レハ調庸の代米、担米等悉皆都合セテ凡二万七千六百十四石四斗許ヲ毎年太神宮司ノ廳院ノ正倉ニ散納シテ神用に宛ツルナリ」とし、ま

た「外ニ公家武家或ハ権門勢家ヨリ寄進セラレシ神田伊勢伊賀志摩ノ三国三百余処アリ、當国他國合テ千四百処許ヨリ決進スル上分ノ代米凡一万余石餘在ケルナルヘシ」といって、神宮領庄園の発達を神宮の隆盛を祝している。数多の神宮領庄園には「是ハ各口入ノ神人アリテ毎年コレヲ催進シ、宮廳ノ調御倉ニ納メテ供祭ノ用ニ宛ツルナリ」其口入ノ神人ハ、凡人ノ下ノ人といっている。所が彼が平清盛に対して次の如き批評を加えているのは興味ある所というべきである。

「右ニ計会セル司廳官廳二座ノ納米合テ四万石許ヲ神用ニ宛テ祭礼ヲ廳重ニ行ヒ来リシニ治承養和ノ頃ニ至テ、平相國清盛公朝政神威ヲ葉如シテ、度会多氣飯野ノ三神部ニサヘ兵糧米ヲ充課セ、神民ヲ追捕セラル。又熊野山ノ衆徒等ハ鎌倉頼朝御ニ一味シテ伊勢志摩二國ニ分置セシ平家ノ家人等ト合戦シ、神部ニサヘ乱入シテ、民屋ヲ焼松ヒ資材ヲ奪取ル。」

神戶封戸御厨御園等ヲ神領シテ神税ヲ消セス」と。清直も弘訓と同じく「八個ノ神郡モ既ニ元弘建武ノ亂以來武家神領シテ有シカハ、此時太神官司氏長任職シテ在ヌレトモ勢ヒ微弱ニシテ對標スル事能ハス。手ヲ空シクシテ、國司ノ管領トナシ、宮司ハタゞ神務ニノミ奉仕スル事ト成リシハ大息ノ至リト謂フヘシ」とと神宮領庄園の支配力の退却を歎いている。その面に鄉村制が発達し、自治共同体が神宮勢力に打撃を与えるようになったことにつき、刀狩制の無力化が招来されたといっている。

「先是明德應永ノ頃ニ宇治山田居住ノ神民ノ中ニ雄勢アル者党ヲシテ古來支配セシ刀狩ノ政ニ隨ハス。永享嘉吉ノ頃

遂ニ乃稱方亡ホシテ、部内ノ政務ヲ議シ、大弐ハ管領ノ國ニ
司ニ批判ヲ請ヒテ決セリ。其覺ヲ年寄ト杯ス。」と。

而して、清直も神官の衰退が戰國時にその極に達して、意豊
時を通し、近世神宮領の成立した事情とのべ、最後に「抑天下
無比ノ神宮ノ如此ク浅マシク成果ヲ給ヘルハ、清直ノ人心私欲ニ
覆ハレテ、崇敬ヲ忘レ掠奪シテ冥慮ヲ恐レス、敎制モ弛ミテコ
レヲ咎メ給ハサルヨリ始マレルナリ。長大息ノ至ナラス。」やと
神宮神官としての態度を表明している。神封通考はその節毎に
興衰をあけてゐる点はその研究態度に敬服すべきものがある。
最後の「皇大神宮御神領神戸御尉御領興廃沿革之事」は奥に
「右依御下向申上ル」とあるように神祇官からの下向に対して、
明治三年神宮から提出した控である。これは前三者と内容的に
は全く同じであり、「中古以来ノ弊風神宮衰頹ノ極ナリ」といっ
ているのも神宮側の立場を同様に表明したものである。

昭和四年の発行にかかる山田市史の神宮史に關するものもさ
きのものより何等進歩をみせていない。この点からも神宮領庄
園についての構造的な研究を推進しなればならぬと思ふ。

神宮領庄園には神戸、仙、牧などの庄園化、寄進型庄園など
が立範圍に存在するが、これら庄園の支配形態や根本領主と領
家たる神宮との得分上分離係など神宮領庄園について究明して
行くのが私の重要な仕事である。これから紹介する庄園史料は
寄進型庄園に關する下総国相馬御尉のものである。相馬御尉は
手濱沿の周辺に存在する手賀、泉、市越などに亘る空間である。
現在神宮文庫に書写し所蔵されている相馬御尉についての文書
の最古のものは平安末における天養二年（一一五四）の源義朝の寄

進状である。しかしこの相馬の地は後の文書で明らかになるに
大治五年比（一一三〇）に神宮領庄園たる御尉に寄進されたのである
が、当時の寄進状は明かにし得ない。

寄進 領地壹處事

在下総國管相馬郡

四至

東限 須渡河江口 南限 南泊上大路
西限 繞令并月吹亭 北限 阿太加并絹河

石處相伝令領地令無他妨於今吉寄進 伊勢太神宮御
尉也 於地利上分者可備進供祭物 鳥巢 太神宮御
限永代所寄進也 於下司職者至子孫孫不可有他妨
仍爲後代勤新勞所寄進如件

天養二年三月十一日 源（花押 義朝）

下司職は根本領主で子々孫々まで繼承することを契約條件に
して、庄園支配の実際の権限を保留した。

次の文書は永暦二年のものである。

寄進 所領御尉壹處事

在下総國相馬郡者

四至

東限 常陸國堺 南限 坂東大路
西限 葛劔辛辺兩郡堺 北限 絹河常陸國堺

右當御尉者自大治五年之比爲太神宮御領所備進供祭上
分也 而後倭廢己年尚矣 受密任依存公 今爲 公家
御前所奉免内外二宮御尉也 是大日本國者惣爲皇太神
宮 豐受宮御領之故也 葦原中國則是也 此國者惣根
本宮御領也 仍雖權門勢家敢以不致相論也 而末代有
免之立民不顧後神尉被引今欲心致妨之間 供祭勤闕

申事常急 爲公爲私無益無礼之事也。仍停止平常澄常胤等之妨。致供祭上分之勤拙別丹誠。欲令勤仕。公家之御祈禱矣。仰當御厨相傳之理旨自國人平常晴手議。平常重并嫡男常胤。依官物員。累議國司藤原親通朝臣。彼朝臣藤二男親盛朝臣。而依西様此條之由。以當御厨公驗所讓給義宗也。然者父常晴長讓渡他人皇處也。常澄常胤等何故可成妨哉。是皆法令大非常之上大謀叛人前下野守義朝朝臣年来郎從等凡不可在王土也。仍在道理爲停止彼惡逆所寄進也者。內宮一依宜俊定。へ外宮へ五依宜彦章等子々孫々長可爲口入之神主。於御厨預職者同以義宗子々孫々可被補任也。但不入本宮御使。毎年無懈怠備進供祭上分。謹所申請聽判如件。

永曆二年正月 日

正六位上前左兵衛尉源義宗

(義家の子)

これによると大治年向に神宮領庄園に寄進された後に何らかの事情でおそらく武家の押領で停廃していたのであるが、奉免の御厨として重要なものであるから、平常澄や常胤等の押妨を停止して供祭上分をなさんというのである。而してこの御厨は國人平常晴から平常重とその嫡男常胤にゆずられたが、官物の賦課をもったので国司藤原親通にゆずり、親通は次男親盛にゆずり、そのような田結の御厨が、御厨の公驗と共に源義宗に讓渡されたのである。したがって常澄や常胤の積功の理由は立たず、義朝郎從等もこの王土には許すべからざる存在で、それらの悪逆をやめさせるために神宮に寄進するというのである。この場合に口入神主は内宮側では一依宜俊定、外宮では五依宜

彦章がなし、彼等の子孫は口入料を得、そして寄進主源義宗は御厨預職の実権を留保した。

これに対する二宮の應判は次の如くである。

就于寄文檢案内以元一宮御領寄進二宮勤仕兩方押役其例多存 何況今焉 公家御祈禱所奉免 内外二宮御領之由寄文狀明曉也 然則件相馬御厨自分以微依下綴推介平常胤寄文 近日雖成与二宮應判如今寄文者理分明之上不知子細之旨常胤言狀具也者歟 先判改与判如件 但若於他領相交者非此限 寄文四通之内二通留兩宮 返二通以判

皇太神宮 依宜六人 判

豐受皇太神宮 依宜六人 判

同年の次の文書は上分と口入料とを明確にしている。

下総國相馬御厨

進上豐受太神宮供祭并口入料四文 白布壹

合百伍十端 五十端上分料 百端口入料

右以五依宜彦章口入之神主毎年無懈怠可進上之狀如件

判 永曆二年二月日 前左兵衛少尉源朝臣御判

件御厨上分口入料任起之言無相違可備進之狀如

件 御判

依宜度会神主判 (一依宜重房)

(七まで)

また次は平常胤が同年にこの御厨に因して内外二宮の應裁を申請しているが、それによってこの御厨の事情が一層明らかになる。

正六位上行下総推介平朝臣常胤解 申請

二所太神宮廳裁設 諸殊蒙 慶判 因准傍例任代代国
郡次第証文等理 自今以後号二宮供祭所 被令備進商
方御覽上分元皇太神宮御領下總国宇相馬御所壹慮狀
在下総国管相馬郡

東限 逆川口笠貫江 南限 小野上大路
西限 下り辺堺并木塚通谷 北限 衣川常陸国堺

石謹檢 案内当御所右是元平良文朝臣所領 其男忠経
其男経長其男経兼其男常重而自経真五郎弟常晴相承之
当初因役不輸之地令進退領常之時立常重依内心之所念
大治年中之比真進皇太神宮御領 專供祭勤之向 其男
常胤保延元年二月伝領之後前下野守朝臣義朝存日 就
于件常晴男常澄之浮言 自常重之手康治二年雖責取献
上文恐神威永可爲太神宮御所之由 天養二年重又令進
別寄文之上国司以常胤可令知行郡務之旨久安二年四月
与判又望看 同年八月重堺定四至令附屬假名荒木田正
富之向 依有祈願 今又所奉寄 豐受太神宮御所也者
蒙 二宮一同之判行以田畠地利上分并土產莊等欲被
令致年中三度御祭六節会御覽之勤○等理自今以後号兩
方供案所 平均被令備進御覽上分者將御神威之責 弥
專国家泰平御祈禱之勤矣 以辭
永曆二年二月廿七日 正六位上行下總權介平朝臣常胤
右によつてこの御所は千葉常胤がその祖平良文から相傳した
ものであり、さきにいったように常重の時に敬神の念から大治
年中に皇太神宮に寄進し、常胤はその政に下司職として相伝し
た。所が保延元年二月(一一三三)前下野守源義朝がその所領に附

して康治二年(一一四三)に押領を企く、神威をおそれ、天養二
年に別に寄進狀を以て神宮に寄進したといふのである。その所
領に因して千葉常胤が支配するよう久安二年(一一四六)に国判が
与えられた。そこで常胤は同年八月に四至を設定し、荒木田正
富を口入として神宮に寄進し、田畠の地利上分と莊土産を供進
することを契約したのである。これに對して神宮側は承諾し、
次の如き廳判をなしている。

判

就寄文檢案内次元一宮御領寄進二宮致兩宮神役者古今之通例
也 則件相馬御所任申請旨 爲二宮御領可令備進供案上分之
狀与判如件 若相交他領者非此限 仍寄文三通 内留二通

返一通 次判

皇太神宮御所宜正四位上荒木田神主判 (六人)

豐受太神宮御所宜從四位上度会神主判 (六人)

五年後の永萬二年(一一六六)に至りその領有の變化を來し、

源賴朝から又寄進契約が成立したのである。すなわち

永起請

下総国相馬御所当肆大白布事

合陸拾段者

右以件布於二季大般若経供料毎年無懈急可令致沙汰

然者至于彦章神主子々孫々永無相違可致沙汰之狀 重

起請之狀如件

永萬二年六月三日 源(花押)

又別に賴朝は次の如く誓約している。

永起請

下総国相馬御厨所当年高料四丈白布事

合伯肆拾端者

石当御厨所当内外二宮上分口入料四丈白布參伯參拾端也 其他願盛神主遊文爲今沙汰取所附記請也 然者至千彦章神主子々孫々永無相違可令辨清之状重所起請如件

永萬二年六月三日

源 (花押)

又

永起請

下総国相馬御厨所当肆丈白布事

合貳佰段内

陸拾段 二季大般告経供料 毎季三十段

伯肆拾段 外宮三神主彦章口入料

右者起請上分内宮佰伍拾段 外宮佰伍拾段也 其外

今依有官願又以所附起請也 然者至千彦章神主子々孫々不可相違之由重起請之狀如件

永萬二年六月三日

源 (花押)

その後は石の状態が継続されたであろうが仁安二年(一一八七)外宮から従来の契約を遵守するよう源義経代官に要求している。

其後四十年向の事情を知る文書が見当たらないが、嘉祿三年(一一三三)

になつて神宮に対する上分するよう地頭に対して鎌倉

幕府から下知したものである。これはおそらく地頭による押領あり、神宮からそれを幕府に対して注進したものとと思われる。

外宮一休宜行玄神主由 下総国相馬御厨上分布夏 先

度地頭令申す細之時 布壹段別募銭參拾文可辨清之由 雖有御下知所詮停止不法 准布以建久時布可令進清 但依布過未出來者早任傍例以錢肆拾文募布壹段代可令清之狀 依御下知如件

嘉祿三年八月十六日

武蔵守平(花押)

相模守平(花押)

これに關しては翌安定二年に、地頭相馬五郎に対して上分を完うするように下知されている。

豐受太神宮神主由下総国相馬御厨上分布并便雜受等夏右於上布者 早任傍例壹端之代募銭參拾文可令更清焉

至使雜受者如給主重成申狀者 先例所清具也 若無

魚之時以代布參端雖辨來 於今者依被圍不魚之時壹端

之代募布貳文可令辨 不然者任先例可清魚云 加地頭

請文者先例不辨布 近年壹端之代布上上上 其後依使

之〇〇壹端之代清……者使雜受等夏於代布者依多少之

論任先例可辨魚 若無魚之時看就相布之法 布壹段〇〇

募銭參拾文可辨之由下候故 所詮先例清魚之旨兩方一

同令申畢 然則且任先例 且就承伏可被清魚狀依御執

達如件

安貞二年八月廿三日

武蔵守(花押)

相模守(花押)

相馬 五郎 殿

これ以後この御厨も鎌倉幕府の中で変化をみたであろうが、神宮領庄園も前にのべたように多く武家に押領されて行った。可早以尼妙智下総国相馬御厨黒崎内下里崎并稻村文向御内

押手村事

石以て尼遣領所被配分也者早守先例可令領掌之狀

依仰下知如件

弘安十年十月二十四日

(二八七)

前武蔵守平朝臣
相模守朝臣

次の元弘三年(二三三三)の文書によると元應二年(二二二〇)には相馬小次郎胤盛の後家が教男女に所領の配分を行ったことがわかる。

相馬小六郎長胤謹言上 欲早任亡父相馬小次郎胤盛後家尼胤盛狀 賜安堵国宣 備向後龜鏡 下提国相馬御厨内泉村内田畠在家……等事

副進一通 系図一通

讓狀案 右田在家等者 亡父胤盛重代相傳所領也 於然田堂今配布教男女 去元應二年三月八日限永代譲与之向 賜御外題 当知行于今無相違者也 早任讓狀 賜安堵国宣 爲備永代龜鏡 恐恐謹言如件

元弘三年十二月

さきにのべた寄進の際の口入職が活却された文書に次の如きものがある。

永活却渡下総国相馬御厨口入分内布代事

合貳箇文書 但當年分也

右件口入職者 元松木長官後家也 而

以去應長元年(二二二二)自僧春惠之手 親父洲貞神主實得知行 送年序畢 爰自彼御手 雖處分給之 爲故親父負物辨償 限直錢拾參貫貳白文 馬上仰阿闍梨御房に相副處分狀案并次第相伝証文 後家相共調連署 永所令活却実正也

後日更不可有異煩 有若遺亂之事者 不謂年紀 以錢一倍 可令礼返 不可又異論者也 仍爲永代 活勞之狀如件

建武貳年乙亥五月一日 一女子康会氏安貞清後家 康会氏文

次の文書は本領安堵の類出たものである。

相馬泉五郎胤康討死子息乙鶴九郎代祐賢謹言上

欲早重以御誓狀預注進 施弓箭面目下總国相馬御厨内泉御并平賀藤心兩郷 新田源三郎 奥州……等事

件條先度具言上畢 今年 建武(三三七)四月十七日下賜御吹鞞狀云 本領安堵被申立恩賞之處 依無御誓文

御注進相残 御不審叙 可申重御注進之由 被仰出之

向令言上者也 於胤康者教度度合戰高名 四月 (建武)

十六日願家(化畠)発向之時令討死聖 乙鶴丸者 於奥

州属石塔涼蔵人殿 致合戦之上者 早預御注進蒙恩賞

爲後代龜鏡 仍恐恐言上如件

同年の乙鶴丸の高師直に対する相馬御厨の安堵願は次の如く

であるが、これによって当時の御相がうかがえる。

相馬泉五郎胤康 今者討死子息乙鶴丸 ④ 下総国相馬御厨

内泉郷 本領 并手賀藤心兩郷安堵事

胤康者 爲御方自奥州致軍忠 去年二三兩月 前代

一族蜂起之時 散散致合戦云云

建武四年八月十八日 陸奥守家長(郷)上

進上武蔵權守殿(富常連)

武家による領有の変化があっても神社税物は備進があったよう

で次の文書はそれとあらわしている。

千葉介御施行案

太神宮領下総国相馬御厨雜掌貞綱申当御厨神稅物等受御奉書案如此 早任彼仰下之旨可沙汰付所務於彼雜掌之狀如件

文和二年（一二五三）九月廿九日

氏胤判（千葉氏胤）

園城寺駿河權守殿

次の文書もこの御厨の變化を示すものとして注目すべきである。

永讓渡子弟推御宜度会神主定連（辰吉）一所太神宮御領下総国相馬御厨口入分并使得分雅受色々物等受

合貳拾貳兩半吉

石御厨吉千葉介常重同常胤季寄 二所太神宮以来良会氏御家相承之餘流（土表）自祖田比丘尼妙忍溪田尼妙善 尼善智度会氏女沙弥明阿等之手 舜憲（少）或謀得 或買領方々相傳官領当知行勿論也 仍相副役奉寄狀次第手進証文等 且爲一族上 且依有師資之儀 永讓与于定連神主畢 早致卒領任先例神稅上分爲先有餘剩者懇被訪妙忍（等田）妙善智智殊舜憲（ササ）吉也 仍爲後代証驗狀如件

貞治三年（一二六四）卯月十五日

權少僧都舜憲判

しかし次の文書では神稅上分が兩如して神役の退職した状態を示し、神宮領庄園の後退が進む過程を示している。

二所太神宮御領下総国相馬御厨雜掌德弘申 当御厨者当国権介平朝臣常重 同男常胤去大治・久安・永曆自季寄二所太神宮御領以来 爲一圓神領 備進元日神役

宮領知照相違候之處 彼代官等以嚴重色々神稅上分等令犯用 於今看此同年分不及運上 神役兩如之条 神慮尤難測候 此上者至彼神稅等者不日云当年分 云当年分 任先例本法員裁 可致其沙汰之由 預御施行相触于地○○○全裁納 弥爲令尊御祈禱之忠勤候哉 恐惶謹言

六月廿三日 伊勢大神宮權師宜定進 在判狀

謹上 下総国守護所殿

それでもその後嘉慶二年（一三八八）には上分がなされている。請取 下総国相馬御厨上分受

合壹貫六百五文者

石当御厨去年分上分依例所請取如件

嘉慶二年八月三日

亦宜度会神主 判

所が元永十一年の文書は神宮領庄園が押領されたことを物語るものである。

二所大神宮御領下総国相馬御厨雜掌德弘謹上

欲早賜運署御解被執申内東御方 被成下嚴密御教書於守護方被停止兵衛治部男領外非分押納 無故此兩三年以垂慈儀

掠成内宮廳室 依令犯用色々嚴密神稅上分等 式日神役

兩如條 且神敵重科 且偏惡狼藉至 神慮難測者也 所詮

被止先展掠成内宮廳室楚忽儀 在当方諸代知行旨 全歸入

部徵納 令致神役勤仕 令專平下太平武運長久御祈禱忠節

子細事

副進一通

與東式日御教書案 石当御厨者当国権介平朝臣常重 同男

常胤 去大治・久安・永曆自奉寄二所大神宮御領以來、馬
一園神領 備進式日神役 神宮領知無相違地也 而彼兵次
郎男相語内宮万 掠取彼廳宣 最重色々仲税上分物等悉押
納之條 神慮難測 重科不輕也 然早賜連署御解狀 被執
申南東御方 被成下嚴密御救書於守護方被止非分犯用之儀
当方之使節遂入部徽納爲令專恒例神役之勤 相言上如件

應永十一年（一四〇四）年十一月 日

石に刻する外宮側の注進状は左の如くである。

豐受大神宮神主

注進可早二所大神宮御領下総国相馬御所將掌徳引申被傳
止兵衛次郎男頼外非分押領 無故此兩年以猪意義 掠取内
宮廳宣 依令犯用色色最重神税上分等 式日神役内如條
且重科不輕極無狼藉條 神慮難測也 所詮被止先日掠取
内宮廳宣是忽儀 任当方諸代知行旨 長久祈禱忠節由事
副進 本糾貝書
石得推掌徳弘今日解狀係子細載于狀具也 然則早被止兵衛
次郎男非分犯用之儀遂入部徽納專神役勤矣者 仍注進如件
以宣

應永十一年十一月三日

(11)

以上は相馬御所に關する史料を紹介してみたのであるが、
これらが神宮領莊園の成立 発展 衰退など 社会的変化と陶
像付てみなければならぬが、これらだけではその試みを果
すことは困難である。今回は神宮領莊園史料の一部をそのま
揭はて諸兄姉の注意を喚起し、教育の現場にあるものがこのよ
うな手近かな史料をわけて、歴史認識の具体化を促したしめるよ

う志向されることありとせば私の企望一層口より出たことと
たと思ふ。